アジア太平洋障害者センター
第３回事前評価（短期）調査報告書

平成14年４月

国際協力事業団
社会開発協力部

目次

1. 要約 ・・・・ 199

2. 短期調査団の派遣
2－1. 短期調査団の目的 ・・・・ 202
2－2. 調査団の構成 ・・・・ 202
2－3. 調査日程 ・・・・ 204
2－4. 主要面談者 ・・・・ 208

3. タイ短期調査団員報告 ・・・・ 209
4. カンボディアニーズ調査団員報告 ・・・・ 216

5. 別添資料
5－1. ミニッツ(含:PO 案、組織図案、プロドク案) ・・・・ 224
5－2. 各分野の活動案検討資料 ・・・・ 238
(情報支援、調整・ネットワーキング、人材育成)
5－3. シリントン王女「誕生日のお言葉」の新聞記事 ・・・・ 280
5－4. カンボディアニーズ調査報告書 ・・・・ 283

1．要約

件名	アジア太平洋障害者センター第3回短期調査
派遣時期	平成13年4月1日(月)～4月11日(木) ※別添日程表参照 (4月2日(火)～4月6日(土):カンボディアでのニーズ調査)
面談者	【タイ側】 (1)障害者リハビリテーション委員会(メンバーは別添ミニッツ ANNEX I 参照) (2)その他面談者は以下のとおり。 ・DTEC Mr.Apinan Phatrathiyanon , Director, Bureau of External Cooperation Mr.Banchong Amornchewin, Chief, Japan Sub-Division ・ESCAP 高嶺豊 Social Affairs Officer 千葉 寿夫 Associate Expert on ICT & Disability 【日本側】 ・日本大使館 岩井勝弘書記官 ・JICA タイ事務所 森本勝所長、 坂田英樹所員、大橋勇一所員 ・リハビリテーション委員会事務局配属 伊藤奈緒子個別派遣専門家
協議結果	以下1～4については、先方との合意事項(ミニッツ内容の要点) 1. 本センターの法的位置付けの確認 (1)本センターは、労働社会福祉省公共福祉局に新規に創設される部(Division)の担当となり、技術協力開始予定の7月までにタイ側により適切な人員が配置され、最低限必要な事務所スペース・機器が用意される。 (2)本年10月に予定されているタイ側の省庁再編により、現在の労働社会福祉省のうち障害者支援に関わる機能は、新規に創設される社会開発人間保障省(Ministry of Social Development and Human Security)に所属し、それに伴い本センターの所管も公共福祉局のひとつの部から、新規に創設される局(名称未定)に格上げされる予定。そのひとつの部として「アジア太平洋障害者センター」が位置することになる。 (3)本センターの公共独立機構化構想時期については、第2次短期調査団訪タイ時に説明のあった 2003 年 1 月ではなく、もうしばらく先になる。 公共独立機構化の具体的体制・時期・方法等については、プロジェクト実施期間中に日・タイで共同で検討していく予定。なお、公共独立機構には、その体制により、いくつかの形式があるが、当センターが目指すのは Autonomous Public Organization との説明であった。 2. 本センターの実施体制 現段階でのプロジェクト実施体制については、上記に記したように、新規に設立される局のひとつの部がアジア太平洋障害者センターとなり、必要な管理職・カウンターパートが配置されることになる。 そのうえで、Executive Board, Board of Trustee, International Advice Board が設置されるが、 それらの機能・人選等については、今後の実施体制・プロジェクト進捗状況に合わせて、具体的な検討が必要。 ミニッツの別添 (ANNEX II)を参照。 3. プロジェクトの具体的な活動計画・人員の TOR・必要機材 (1)R&D に関しては、第4の柱とはせず、各活動のなかで実施していくことで合意がなされた。 活動の分野毎にワーキンググループをつくり、今回タイ側と日本側で検討したプロジェクトの具体的な活動計画・人員の TOR・必要な機材については、タイ側でより詳細に検討・精査し、タイ側に示したプロドクのコメントと合わせて4月末までに、JICAタイ事務所を通じて提出される予定。

団長所感	1. R/D 締結時期 以下の理由により、当初計画どおり、技術協力プロジェクト7月1日開始を目指して、R/D 締結準備を開始することとしたい。 ●前記のとおり、省庁再編後の本プロジェクト所管官庁が明確であること。 ●5月 ESCAP 総会、6月 TWGDC 等で本プロジェクトコンセプトを説明し、アジア・太平洋州諸国に本プロジェクトへの参加を促進をする必要があること。 ●5月末に予定されている無償基本設計調査との連携を確実に図るためにも、技術協力プロジェクトの内容を早急に固める必要がある。 なお、R/D 締結に関して下記の点に留意する必要がある。 ・タイでは今年度から、機材・専門家要請等スキーム毎の要請からプロジェクト毎に一括して要請を取り付ける方式で取り決めを行うこととなっている。この新しい R/D 締結方式に今までより、時間を要することが予測されるので、R/D 締結前に R/D(案)を作成し、DTEC を含めたプロジェクト関係者と具体的な検討を前広に実施すべく、調査団(員)派遣を検討する必要がある。 ・10 月の省庁再編での所管官庁名の変更に柔軟に対応するために、省庁再編後に、改めての追加・修正 R/D の締結等も合わせて検討する。 2. カナダ国籍 JICA 専門家の受け入れ ●日タイ技術協力協定においては、「日本国籍を有するものが日本人専門家と解釈される」との外務省条約課の見解が、DTEC からの説明された。 ●今後、カナダ国籍 JICA 専門家を本プロジェクトの専門家として派遣する方法として、以下の進め方が考えられる。 ① カナダ国籍有する JICA 専門家を本プロジェクトの専門家として派遣しなければならない理由を文書化し、再度、公式に DTEC に検討を依頼する。 ② 特権付与を求めないなら、カナダ国籍の JICA 専門家をタイが受け入れることは問題ない旨も DTEC から説明された。タイに派遣される JICA 専門家に付与される特権について具体的に検討し、その一つ一つを個別に獲得する方法を DTEC の助言・支援を受けながら検討する。 ●①②を平行して実施する必要があるが、暫定的に同専門家を短期調査員として、派遣することも検討する。 3. 広域技術協力 ●本プロジェクトの裨益者が、主にタイ以外の国である場合は、DTEC の所管とするかどうかも含めて、閣議承認が必要な場合もある旨、DTEC からの説明があった。 ●また、Center for Region であればバイの技術協力で実施可能であるが、Regional Center であれば、参加国の同意がセンター設立前に必要ではないかとの意見も DTEC から出された。 ●本センターを確立するための「タイ側の実施能力の向上」に焦点をあてた R/D の記載表現方法を、閣議承認等を必要としない形で本件は進めるべきと思料する。 また、参加国の理解と協力を得るための説明・方法についても合わせて具体的に検討してゆく。

フォロー事項	● 各活動の詳細計画等の精査とプロドクに関するコメントが、4月末までに JICA タイ事務所に提出される予定。 ● 本プロジェクト担当部設置状況の把握。 ● カナダ国籍 JICA 専門家の受け入れに関する具体的な検討。
今後のスケジュール	2002年4月末 タイ側で引き続き詳細検討なされている活動計画・機材およびプロドクへのコメントが提出される。 2002年5月 R/D(案)検討およびプロジェクト活動計画策定に利用する情報収集の為の調査員の派遣(2002年5月2日～6月26日) (2002年5月 R/D(案)検討の為の調査団の必要性を検討し、派遣も検討) (2002年5月末 無償基本設計調査団の派遣) 2002年7月 技術協力プロジェクトの開始
カンボディアニーズ調査報告	【訪問団員】 日本側団員およびタイ側団員による合同調査の実施をおこなった。 カンボディアニーズ調査に関しては、中西由起子団長、二宮アキイエ副団長で 【主な訪問先および面談者】 ・ 在カンボディア日本大使館 小川郷太郎大使 ・ JICA タイ事務所 松田教男所長、遊佐敢職員 ・ 在カンボディアタイ大使館 Mr.Kosit 公使 ・ 社会労働省(MOSALVY) リハビリテーション局 Mr.Touch 副局長, 林専門家 ・ Council for the Development of Cambodia(CDC) Ms.Heng Sokun 海外協力部長 ・ Disability Action Council (DAC) Mr.Ouk 事務局長 ・ NGOs(NCDP,CDPQ, ADD, Rehab Craft Cambodia, Kien Khlean Rehabilitation Center, Handicap International) 【協議・調査内容】 詳細については団長・副団長報告参照 ・ 各訪問先に対しアジア太平洋障害センターに関するコンセプトの説明と具体的な活動協力にかかる意見交換の実施。 → 概ね大きな関心が表明された。具体的な連携方法に関し意見交換。 ・ フォーカルポイントとなりうる機関の調査と協力依頼。 → DAC および MOSALVY がフォーカルポイントであり、今後これらの機能強化を図るべきことが確認された。 なお、第三国研修に関してはタイ大使館、事務手続きに関しては CDC との連携も必要となる。 ・ 別添アンケート用紙を利用した障害者へのニーズ調査の実施を行った。方法としては、(1)関係団体を通しての記入依頼 (2)障害当事者を招聘したワークショップを実施してのヒアリング調査 (3)フィールドビジットでの聞き取り調査により、計 100 人近い対象者への調査を実施できた。 なお、アンケートを実施するうえで、「アンケートのカンボディア語訳(カンボディア有識者による内容・表現方法確認)」、「視覚障害者の為の点字訳」、「非識字者の為の筆記者」、「聴覚障害者向けの手話通訳」を手配した。被調査者の大多数は NGO とすでに何らかの関わりのあるものであり、農村に居住する多くの障害者より生活のレベルも高いと思われたが、一様に経済的な問題を訴えていた。さらに、周りによいロールモデルもないため、将来に対して大きな希望をもてないでいる現実が伺えた。 ・ 地方農村での障害者自助グループ見学 首都プノンペンから約1．5時間離れたコンポンスペウでの ADA のプロジェクトサイトの見学を実施。 ADA は草の根レベルでの当事者グループ育成に力を入れており、訪問した農村でのグループでは、村全体の発展と村の発展への障害者の関与を目的として、グループ活動に関わる会費を井戸作りに活用していた。 但し、カンボディアでは地方の障害者やその当事者グループの実態に関する情報が限られているので、今後も活動に生かすべく情報収集が必要である。

2．1 派遣の目的

(1) プロジェクト／センターの実施体制

ア ステータス：公共独立機構化の手続き、スケジュール

イ 運営管理機能：国際諮問委員会、JCC、Executive Board の役割

ウ 組織図の見直し

エ 財政的基盤：自立発展性の確認（プロジェクト終了後のステータス）

オ 活動内容： R&D（研究開発）の位置づけ

(2) Regional Cooperation の枠組み

ア 周辺国との協力の枠組み

イ 合意形成方法

(3) プロジェクト・ドキュメント確認・完成までのスケジュール

ア PDM(Project Design Matrix)確認

イ PO(Plan of Operation)確認

(4)R/D 確認

ア 内容

イ 締結時期

(5)周辺国（カンボディア）における関係機関ニーズ調査

ア 協力の枠組みの可能性

イ 当事者へのニーズ調査

2．2 短期調査員構成

(1)官団員（7名）

担当分野	所属先	氏名
総括・団長	JICA 社会開発協力部 社会開発協力第一課長	乾 英二（タイのみ参加）
副団長	ｶﾅﾀﾞｱｼﾞｱ社会福祉研究所代表	ニノミヤ アキイエ
センター運営協力	北星学園大学社会福祉学部教授	松井 亮輔（タイのみ参加）
障害者向 IT 協力	ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ協会 情報ｾﾝﾀｰ長	河村 宏（タイのみ参加）
CBR 分野協力	ｱｼﾞｱ・ﾃﾞｨｻﾋﾞﾘﾃｨ・ｲﾝｽﾃｨﾁｭｰﾄ代表	中西 由起子
介助人	ヒューマンケア	村山 こずえ
協力企画	JICA 社会開発協力部 社会開発協力第一課特嘱	奥井 利幸

(2)タイ側団員(6名)(カンボディア合同調査)

担当分野	所属先	氏名
障害者支援政策	ｱｼﾞｱ太平洋障害者ｾﾝﾀｰ小委員会座長(ﾗﾁｬﾊﾟｯﾄ大学ｽﾜﾝﾄﾞｳｼｯﾄ校助教授)	Ms. Benja Chonthanonta
協力企画	公共福祉局 障害者ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ委員会事務局秘書課長	Ms. Saranpat Anumatrajkit
障害者向 ICT 協力	世界盲人連合アジア太平洋評議会理事	Mr. Monthian Buntan
障害者の自立生活	DPIｱｼﾞｱ太平洋ﾌﾞﾛｯｸ事務局開発担当官	Mr. Topong Kulkhanchit
介助人		Mr. Witthaya Wanapruek
協力企画	JICA 個別専門家	伊藤 奈緒子

(3)コンサルタント団員(2名)

ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ効果分析	IC ﾈｯﾄ(株)	井田 光泰(タイのみ参加)
ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ効果分析	IC ﾈｯﾄ(株)	元澤 秋子

2－3．スケジュール

* **Japanese Group I** : Ms. Nakanishi, Mr. Ninomiya, Ms. Motozawa, Mr. Okui, Ms. Murayama (=PA to Ms. Nakanishi)
* **Japanese Group II** : Mr. Inui, Mr. Matsui, Mr. Kawamura, Mr. Ida
* **Thai Group I** : Dr. Benja, Mr. Monthian, Ms. Ito
* **Thai Group II** : Ms. Saranpat, Mr. Topong, Mr. Wittaya (=PA to Mr. Topong)

Date	Time	Activities	Remarks
1 Apr. (Mon)		**Japanese Group I (Ms. Nakanishi, Mr. Ninomiya, Ms. Motozawa, Mr. Okui, Ms. Muroyama)**	
	11:00	Depart from Tokyo[TG641]	
	15:30	Arrive in Bangkok	
	17:30-19:00	Hold an internal meeting with **Thai Group I & II** at the Amari Airport Hotel lobby, the Ground floor	
2 Apr. (Tue)		Japanese Group I & Thai Group II (Ms. Saranpat, Mr. Topong, Mr. Wittaya)	
	06:45	Depart from Bangkok [TG696]	
	08:35	Arrive in Phnom-Penh	
	14:00	Visit JICA Cambodia Office	
	15:30	Visit the Embassy of Japan in Cambodia	
3 Apr. (Wed)		**Japanese Group I & Thai Group II**	
	08:30	Visit National Center of Disabled Persons (NCDP),	
	10:30	Visit Cambodia Disabled People' s Organization(CDPO)	
	11:30	Visit Action on Disability and Development(ADD)	
	14:00	Rehab Craft Cambodia	
	16:00	Kien Klean Vocational Training Center(ARR)	

4 Apr. (Thu)	09:30 11:00 12:30 14:00 15:00	<u>Japanese Group I & Thai Group II</u> Visit a Handicap International(HI) <u>Japanese Group I , Thai Group I (Dr. Benja, Mr. Monthian, Ms. Ito) & Thai Group II</u> Visit Ministry of Social Affairs, Labour, Vocational Training and Youth Rehabilitation (MOSALVY) Lunch hosted by the mission leader, Ms. Nakanishi Visit the Royal Thai Embassy in Cambodia Visit Disability Action Council (DAC)	
	08:35 09:50 17:30 18:50	**Thai Group I (Dr. Benja, Mr. Monthian, Ms. Ito)** Depart from Bangkok [TG696] Arrive in Phnom-Penh Visit MOSALVY directly from the airport Follow the same schedule of Japanese Group I & Thai Group II **Thai Group I (Dr. Benja only)** Depart from Phnom-Penh [TG699] Arrive in Bangkok	
5 Apr. (Fri)	08:30 - 12:00 15:00 16:30	<u>Japanese Group I , Thai Group I (Mr. Monthian, Ms. Ito) & Thai Group II</u> Discussion with PWD organizations(Hold Workshop with PWDs) Visit JICA Cambodia Office Visit Council for the Development of Cambodia (CDC)	
	AM/PM 18:50 19:55	<u>Thai Group I (Mr. Monthian, Ms. Ito)</u> Follow the above schedule Depart from Phnom-Penh [TG699] Arrive in Bangkok	
6 Apr. (Sat)	06:30 -13:00	<u>Japanese Group I & Thai Group II</u> Field Visit to Kom Pong Speu(Self-help Group) ADD Leave Phnom-Penh downtown for the airport	

	18:50 19:55	Depart from Phnom-Penh [TG699] Arrive in Bangkok	
7 Apr. (Sun)	AM/PM 17:30- 19:00	**Japanese Group I** Work individually Hold an internal meeting	
	11:00 15:30 17:30- 19:00	**Japanese Group II (Mr. Inui, Mr. Kawamura, Mr. Ida)** Depart from Tokyo[TG641] Arrive in Bangkok Hold an internal meeting	
	11:45 15:35 17:30- 19:00	**Japanese Group II (Mr. Matsui)** Depart from Kansai [JL623] Arrive in Bangkok Hold an internal meeting	
8 Apr. (Mon)	09:00- 17:00	**Japanese Group I & II** Hold a meeting on the Project Document on the Asia-Pacific Development Center on Disability with **Thai Group I &II**	
9 Apr. (Tue)	09:00 10:30 13:30 -17:00	**Japanese Group I & II** Visit JICA Thailand Office (Mr. Morimoto etc.) & Embassy of Japan (Mr. Iwai) *Visit Department of Technical and Economic Cooperation (DTEC)* Hold a meeting with responsible officers of OCRDP and the sub-committee members on the center	
	10 Apr. 00:30 12Apr. 07:00	**Mr. Matsui of Japanese Group II** Follow the above schedule Depart from Bangkok [TG970] to Zurich Arrive in Zurich and take a flight to Geneva	

10 Apr. (Wed)	08:30 -12:00 15:00	**Japanese Group I & II** Hold a meeting with responsible officers of OCRDP and the sub-committee members on the center Hold the signing ceremony of the Minutes of the Meeting (M/M) on the center Signer from the Japanese side: Mr. Inui, the Team Leader Singer of the Thai side: Ms. Surapee (Tentative), Deputy Director-General of DPW	
	23:00 11 Apr. 07:30	**Mr. Inui of Japanese Group I** Follow the above schedule Depart from Bangkok [TG642] Arrive in Tokyo	
11 Apr. (Thu)	11:00	**Mission I & Mission II (Mr. Kawamura, Mr. Ida)** Report the mission to JICA Thailand Office (Mr. Morimoto etc.)	
12 Apr. (Fri)	11:20 19:00	**Mission I (except Mr. Ninomiya) & Mission II (Mr. Kawamura, Mr. Ida)** Depart from Bangkok [TG640] Arrive in Tokyo	

2．4 カンボディアニーズ調査 主要面談者リスト

2002年4月2日～4月6日

Mr.Kosit Chatpaiboon	Minister	Royal Thai Embassy in Cambodia
Mr.Ouk Sisovann	Executove Director	Disability Action Council(DAC)
Mr.Son Song Hak	Executing Director	Cambodian Disabled Peoples's Organization (CDPO)
Mr.Srey Vanthon	Programme Manager	Action With Disability (ADD)
Mr.TOUCH SAMON	Deputy Director General	Ministry of Social Affairs,Labour,Vocational Training and Youth Rehabilitation(MOSALVY), General Directorate of Social Affairs and Youth Rehabilitation
Mr.Yi Veasna	Executing Director	NCDP
Ms.Heng Sonkun	Director,Bilateral Coordination Dept.	Council for the Development of Cambodia (CDC)
Ms.Huoy Socheat	Director	Kien Khlean Rehabilitation Center (Association for Aid and Relief:難民を助ける会)
Ms.Isabelle Plumat	Country Director	Handicap International (HI)
Ms.Pascal LAURENT	Director	Rehab Craft Cambodia
小川郷太郎	在カンボディア日本大使	在カンボディア日本大使館
松田教男	所長	JICAカンボディア事務所

3. タイ短期調査　団員報告

副団長所感

件名: アジア太平洋障害者センター第3回短期調査
派遣時期: 平成13年4月1日(日)～4月11日(木)

1. 4月8日(月)はタイの休日にもかかわらず、タイ側は政府関係者、リハビリテーション委員会、障害者当事者等多くの参加者を得た。本センターへのタイ側の期待が大きく、また、今回は事業内容を具体的に協議できた。
2. 4月9日、10日、タイ側、日本側両方に障害を持つ有識者が積極的に発言し、当事者の立場から当センター活動について意見を得られた。当事者中心に運営・活動する当センターの理念に沿ったものであった。身体、視覚、聴覚などの障害を持った有識者で異なる障害への配慮が得られた。
3. 障害者リハビリテーション委員会事務所（OCRDP）の新所長、Ormporn Nithayasuthi が熱心に今回の協議に参加し、タイ側の本センター設立に関して積極的な態度を示してくれた。アジア障害者開発センター委員会委員長 Dr. Bennja をはじめタイ側は当初の計画どうり、技術協力プロジェクト7月1日開始を期待している。
4. 今協議会の前に、日本・タイ合同調査ミッションをカンボジアで実施したことにより、大変意思疎通がスムーズにできた。また、本センターが共同プロジェクトである意識つくりができた。今後、機会があれば、同様な共同調査団をアジア太平洋地区に出すことは有益である。
5. タイの省庁再編後の本センターの位置付けがかなり明確であり、10月から発足する社会開発人間保障省に再編され、当センターの所属課は所属局に格上げされる予定である。したがって、編成後は当センターの位置付けは現在よりも重要視されるようである。
6. なお、カンボジア調査については前回提出した報告書を参照のこと。

第３次短期調査に参加して

中西由起子

今回のミッションもセンターは前回にも増して、実りのあるものであった。独立化の問題、組織体制、活動内容、ネットワーク化のあり方、研究開発の分野の取り扱いなどの懸案事項に対して議論が深められ、タイ日双方の共通理解を深められたことは、非常に意義があったと思っている。

担当した人材開発の分野、つまり自立生活（ＩＬ）、自助団体、ＣＢＲに関しても大いに前進が見られた。短い時間ではあったがタイの休日を利用して本会議前にもたれた作業会議で、タイ側でこの分野の第１人者である専門家を交え、提案されている６コースに関して詳細が詰められ、実施に向けての体制が整ったことは喜ばしい。人材開発はなかなか成果がみえにくいとよく言われるが、第三国研修で障害者のリーダー養成が着実な効果を上げているように、ＩＬやＣＢＲにおいてタイを中心に障害者リーダーが育っていくと確信している。

カンボジア調査ミッションに関しては別途報告したが、合同で実施するとい方法は好評であった。タイがインドシナ地域の経済的、社会的核となっている現状から考えれば、タイ側も何らかの経費を負担できるはずであるとの議論もあるが、あと１，２回はこのような形式で実行し、成果を蓄積することとが優先事項であると考える。センターはタイだけのものではなく広域性をもつことは関係者以外にも浸透しつつあるので、将来的には可能な事項である。

次回訪問時には、センターの構想がすぐにでも稼動に移せるようなビジュアルに表現できるものになってることを確信している。

センター運営について

松井　亮輔

1.　公共独立機構化について

昨年12月の調査団によるヒアリングの際には、2003 年 1 月を目処に公共独立機構化するということであったが、今回の調査ではさらに時間をかけてその準備を進める必要があるということで、今のところ JICA の協力期間が終了するまでに公共独立機構への移行を目指すという。つまり当初の5年間にセンターは政府機関として運営されるという。

2.　省庁再編によるセンターの位置づけの変化について

10 月の省庁再編で現在の Ministry of Labour and Social Welfare は、Ministry of Labour と Ministry of Social Development and Human Security に分かれる。その際、現在の Office of Committee for Rehabilitation of Disabled Persons に新しくできる Ministry of Social Development and Human Security and Department に格上げになり、それに伴い、center はその中の Division として位置づけられる予定。

3.　センターの人事について

センターに配置されるスタッフは、10 月の省庁再編の前、具体的には 7 月までに決定される予定。今のところセンター所長も含め 5-6 名のスタッフ(公務員)と、3 名の職員が配置される予定。

センター所長の権限(？)

4.　センターの予算について

センターの予算としては、5 年間で 2500 万バーツ、つまり年間 500 万バーツを予定。その予算で不足するものについては、フランクリン・ルーズベルト国際障害者賞 5 万ドルをベールに「基金」を作り、その基金から充当する予定。

この基金運営のために Board of Trustees を作り、そこで、Fund-raising も支援。

- 想定されている基金の規模や、Fund-raising の方法？
- センターが独立公共機構化された後も、政府から引き続いて一定規模の補助金は給付されるが、基金など自前の財源でカバーすべき予算額が増えないことが予想される。

5.　センターの建物が完成するまでの間のセンタースタッフ及び日本人専門家の事務所スペースについて
どこにそのスペースが用意されるのか？

6.　Executive Board のメンバー構成と役割-権限？

7. International Advisor Board のメンバー構成と TOR

団員所感

情報支援およびICT研修担当
河村　宏

1．情報支援について

タイ側カウンターパートであるM. Buntan氏と今回はじめて情報支援の具体的な内容と展開について意見交換し、別添のPower Pointファイルに当方でまとめてOCRDPとの協議に提案した。

施設・設備については、周辺国調査も踏まえてWebベースの情報提供が可能なところから、電気の供給もままならない地域、あるいは非識字者、書記文字の無い言語を母語とする障害者への対応もにらんだマルチメディアの情報パッケージ提供にまで目配りをした包括的なものを提案しており、すべて経済的に許せば実現可能であり有用なものを列挙してある。無償資金供与の規模等が不明なため、一応フルスケールの活動に耐えるプランを今回描いた。

ESCAPのTWGDCの諸会議が6月末に予定されており、広域の情報支援に関するニーズ調査と中核的な協力組織との提携の機会は、これを逃がすと10月まで無いので、本プロジェクトが広域に裨益するものであることを明らかにしつつ協力態勢を構築するために、タイ側と十分協力しつつTWGDC会議を活用して、調査・情報収集・協力組織（個人を含む）発掘を行っておくことが本センターの情報支援活動を充実させるための鍵である。

また、Webを活用できる域内組織に対しては、Webアクセシビリティーに関する研修を中核にして、組織的なセンターへの情報提供を行うための各種フォーマット形成のためのワークショップ（1週間程度の集団研修または第三国研修）をできるだけ早く開催したい。

2．ICT研修について

前回までの合意で十分内容は尽くしているので、今回は内容についての変更はない。機材については無償の施設・設備と深く関わるため、無償の内容が固まるまでは具体的な提案がしにくい状況にある。

今回のカンボジアの周辺国調査結果にも見られるように、同じカンボジアでもDACはE-mailを活用し、Webのホームページを自ら運営しているが、Webの存在も知らない非識字者の障害者も多数いるのが実情である。そのような状況を踏まえて、非識字者に本人の言語で自立を支援するための教材製作をアクセシブルなICTを活用して行う活動の重要性が再認識された。

また、6月のTWGDCで議論され、採択される予定のICT Accessibility Policy Guidelineの成否はセンターのICT研修の域内全体で合意したベースラインとなりうるので、より良い実践的なガイドラインが形成され、センターの活動に生かせるように、6月に予定されるESCAPおよびDPWが主催するICT Accessibility Seminar（20-22日、UNC）の成功に向けて、専門家派遣等で積極的に協力することが望まれる。

介助者として参加して

村山　こずえ

１．使えるバリアフリーと使えないバリアフリーについて

今回のミッション期間中に、３つのホテルに宿泊した。それぞれのホテルは、当然のことながら風呂やトイレ等のデザインが異なり、障害をもつ人々が利用する際にすべての点において満足できるところはなかった。もちろん、障害の種類や程度は人によって様々であり、１人１人のニーズに対応できるようにデザインすることは、非常に難しいことではある。しかしながら、せっかく手すりがあったとしても、位置が悪かったり、握りにくかったりして、使えないことがしばしばあった。また、設置されたスロープに、荷物が積み上げられていて（日本ではよくあることだが）通り道をふさいでしまっていることもあった。バリアフリーを考慮した設計になっているにもかかわらず、使えない・使いづらくしてるのは非常に残念であると思った。

カンボジアの調査期間中は、特に、数多くの物理的バリアに遭遇した。しかし、ミッション参加者による現地の交渉が実を結び、幾つかの場所にスロープが取り付けられることになった。特に、ホテルの入り口には、到着した日の夕方には、木製のスロープが取り付けられた。バリアを取り除くためには、批判するよりも具体的な提言をしていこうというグループ全体の姿勢に学ぶところが多かった。新しく作られたバリアフリー施設が、今後本当に使えるものになるには、それを利用する障害当事者からの意見を反映させ、改善していくことが非常に重要であると思う。

２．介助者のスタンスと業務報告の方法について

障害をもつ専門家が短期調査に参加する際に、その業務遂行のハード面を支えるのが介助者である。障害当事者が指示を出し、介助者がその介助内容を実行するのが通常の形態である。これは、介助者が「親切心」で行ったことが、必ずしも障害当事者の要望にこたえていないため、余計なことをやらないための基本ルールであるともいえる。ミッションに参加する介助者の雇用者はＪＩＣＡであるが、指示は直接障害当事者から受けることになる。介助者は、いつでも介助ができるように準備していなければならないので、所在を常に明らかにしていなければならない。介助派遣の期間中に行われる会議等は、オブザーバー参加になるが、介助に必要となる情報提供をしていただきたいと思う。もちろん、会議資料については取扱いに注意を要する内容もあるので、提供される情報の選択する必要があると思う。今後、障害をもつ専門家が複数派遣される時には、介助者も派遣されることもあると思うが、介助という仕事を通して様々な国の障害をもつ人々の活動を学ぶことができる非常によい機会を提供することになると思う。

一方、ＪＩＣＡとの契約で派遣された介助者の業務報告は、本来介助内容そのものの報告になると思う。一般的な介助は、寝る直前まで、または、睡眠中も障害によっては行われることもあり非常に長時間で多岐にわたる。しかし、プライバシーに関わる内容がかなり含まれるため、このような報告形式で公開するべき内容ではないと思う。そこで、簡単なメモ（介助時間・介助中に気づいた事等）を別途ＪＩＣＡ事務局へ提出することを提案したいと思う。それによって、介助者が何をしているのか、障害をもつ人にとって介助者がなぜ必要なのか説得力をもつと思う。

4. カンボディア短期調査　団員報告

団長所感

中西由起子

初めてのタイとの合同調査ミッションは、過去2回タイにおける会議で人間関係やセンターに対する共通の認識ができていたので、責任を分担しつつ、有益な調査結果を生むことができた。ベンジャ、モンティアン両氏は一部しか参加できず非常に残念であったが、サランパットおよびトッポン両氏が全日程我々と行動をともにし、カンボジアの障害分野の現状、特に障害当事者の生活に関して共に学べたことは将来のプログラム策定にとても有効であると考える。

訪問した MOSALVY を初めとする政府機関、半官半民の立場をとる Disability Action Council や National Center for Disabled Persons、CDPO や ADD などの NGO から概ねセンターの活動に関して賛同を得られた。在カンボジア日本大使館とタイ大使館においてもこの広域プロジェクトの性格に対する理解が得られたと同時に、プロジェクトの実施にともなう業務への協力支援にも快く応じてもらえ、国際的なプロジェクトの側面が強化された。以上により、カンボジアの関係機関、団体にセンターのプロジェクトに関して周知を図り、彼らからセンターのプロジェクトへの支援を得るというミッションの第一の目的は果たされた。

もう一つの目的であった障害者のニーズ調査は、非識字率が特に障害者の間で高く、かつ地方に在住する障害者にいかにアクセスするかという手段が問題であるカンボジアでは、非常に困難な課題であった。しかし短期の滞在にもかかわらず、農村部および都市の貧困層の障害者への聞き取り調査を含めて 100 件ものケースが関係者の協力により集まった。国内の全体像でないものの、障害者のニーズの一端を把握することができたことは非常に喜ばしい。

今回のミッションが成功したことは、日タイのミッション団員、カンボジアの関係機関、さらに JICA カンボジア事務所の協力があったからであり、大いに感謝している。

副団長報告

報告者;二ノ宮　アキイエ
日程;2002年4月2日から4月6日

1. 今回の調査はアジア太平洋障害開発センター設立に関するタイ周辺国調査である。したがって、タイ国人との始めての合同調査であった。日本側4人、タイ側4人の計8人である。
2. 団長および、タイ国の主要調査メンバーは障害を持つ専門家であった。したがって、障害当事者による当事者への調査であり、センターの当事者中心の理念に沿ったものであった。
3. カンボジアは開発途上国であり、また、内戦を通じて戦争被災者が多くいるところである。したがって、今後センターとの協力関係を結ぶ基礎固めのミッションでもあった。
4. 訪問先は政府関係機関および、非政府機関、合計12団体であった。　政府関係はカンボジア政府関係だけでなく、タイ国大使館、日本大使館を含むものであった。非政府団体は障害者団体、障害者のためのサービス団体、そして、それらの連絡機関であった。それらの機関、団体はおおむねアジア太平洋障害開発センターの理解をしてもらった。また、将来のセンターのフォーカルポイントになる政府機関、非政府機関がある程度、特定できたことは成果である。
5. さらに、4月5日には障害者のワークショプを開き、異なった障害を持つ人たち76人が参加した。3つのグループに分けて討論会をした。その内容はアジア太平洋障害開発センター設立に対する期待、ニーズであった。すべてのグループは障害を持つ調査団メンバーがしたので、カンボジアの障害を持つ参加者は心を開いて語り合っていた。障害を持つ当事者による調査は障害者の本音を聞きやすい。
6. 訪問先では障害を持つ調査団長を迎え、当センターが障害を持つ人たちのエンパワメント、そして、バリアーフリー社会の構築を目的とするセンターの理解がしやすかったようである。
7. しかしながら、建物、移動のアクセシビリテイが悪く、移動に大変不便をした。また、政府関係の建物はアクセシビリテイが悪く改善の必要がある。今回の訪問は車椅子使用者が2人あり、その点、受け入れの団体は配慮をしてくれ、今後の改善の推進になればよいと願う。
8. 今回の調査は草の根レベルの障害者に面会できてよい成果を得た。しかしながら、都市部の障害を持つ人たちが中心で、十分、農村レベルの障害を持つ人たちに面会ができなかった。ただ、半日、Kom　Pong　Speuの農村地区へ行きセルフヘルププロジェクトを訪問できたことは成果であった。
9. 国民の多くが教育の機会が少なく、特に、障害を持つ人たちの識字率がだいぶ低いよう

である。したがって、最低限の言語能力、コンプーター能力を持つ人がほとんどいなく、ICT のプログラムはあまり参加できないと Council for the Development of Cambodia の代表者が言っていたのは今後の参考になる。ちなみに、インターネットのホスト率は10万人に1．3人である。(2000年)

10. 障害を持つ人たちの自立生活、CBR には多くの障害を持つ人たちが参加を希望していた。また、非政府機関の多くが期待も持っているようである。また、センターとの協力、開発、フォローアップにもある程度期待感を示してくれた。
11. 短い期間であったが、多くの政府関係者、非政府関係者、障害を持つ人たちに面会できたのはカンボジア JICA 事務所の多大なる協力に負うところが大きかった。
12. 調査はクメール語の質問表、また、クメール語の点字を用意したのがよかった。こんご、センターの活動はその国の言語、点字に翻訳する手本にもなった。中西団長のきめの細かいカンボジアの障害者との連絡、協力依頼が今回の調査に大きく貢献した。

以上

Report

Yukiko Nakanishi, Japanese Group Leader

This is the first joint mission of Thai and Japanese experts for the project of the Asia-Pacific Development Center on Disability. We so often met and discussed the mission, vision, strategies and activities of the Center, so that there has been a strong tie based on mutual trust. Whenever the presentation on the Center was made for MOSALVY and NGOs during the mission, both sides could help each other to explain as appropriately as possible.

The typical reaction of the government and NGOs on the Center project is that how much they could equally participate in it. In addition to it, they wanted to make contribution by giving us suggestions and advises to the management of the Center as well as by assuring the provision of disability-related database. Therefore, the overall climate of disability community in Cambodia regarding the Center was quite positive. It encouraged us in further working for the project plan of operation.

The highlight of the mission is the discussion with PWDs on their basic needs. To our happiness, approximately 70 PWDs met us to share their issues in daily living and personal stories. In order to make their dreams come true, they have been making efforts through participating in training courses, attending night schools, seeking information on services, and developing their self-help groups. Since communication was done through English-Khmer interpreters and sign language interpreters, it took a lot of time. In case that we organize a similar meeting, there should be a plenty of time for every participant to give their remarks fully.

Special thanks goes to Mr. Yi Veasna of the National Center for Disabled Persons who was kind enough to revise the Khmer translation of the questionnaire on the needs of PWD so as to make it best fit to the local situation. The cooperation of CDPO is also highly appreciated in organizing the discussion meeting with PWDs. We are also grateful to JICA-Cambodia Office for provide logistic support including making well-considered itinerary in spite of our limited days of stay.

Cambodia will become one of the best partners of the Center. It is expected that PWDs will benefit from its activities and be empowered to support their peers with disabilities and to help establish consumer-centered policy in the country.

An Additional Report

Akiie Ninomiya; sub-leader

The followings are additional comments.

1. Accessibility

   Two Mission team members used powered wheelchairs. Most of the visited places were not accessible for wheelchairs, therefore the Government and NGOs need to promote accessibility for PWDs. Especially organizations working with PWDs may take initiative to promote its accessibilities.

2. Persons with disabilities in rural area.

   This mission was able to meet PWDs in urban area, but it was difficult to reach out PWDs in rueal area. Therefore in future, it is important to visit rural area to seek PWDs and their needs. It was estimated that 70 % of PWDs live in rural area.

3. Leadership by PWDs

   This mission was lead by PWDs jointly with Japanese and Thai experts with disabilities. It was more efficient to get information and PWDs voices for the Asia-Pacific Development Center on Disabilities, since Cambodian PWDs were very cooperative and seemed to have peer-counseling effects for data collection process by PWDs' leadership and coordination.

2002年4月7日

アジア太平洋障害者センター第3回短期調査
カンボディア調査概要（2002年4月2日～6日）

■ 関係機関の訪問

標記カンボディア調査において、政府団体、非政府団体など障害者支援関係機関12団体を訪問、アジア太平洋障害者センターについての説明を行い、関係者からの意見を仰ぐと共に、センターへの関心及び現状ニーズに伴うセンターへの期待について調査を実施した。さらにカンボディア調査最終日において、草の根レベルで活動する当事者団体メンバーを訪問し、地域における現状及びニーズを確認することができた。各団体の責任者、及びメンバーである当事者は、センターでの活動を理解すると共に、積極的に協力する姿勢を見せている。

■ 障害当事者ワークショップ開催 - 4月5日

障害者支援を行う非政府団体で活動する障害当事者、及び団体に所属するメンバーを集ったワークショップを開催、68名の障害当事者が参加した。ここでは、質問調査の実施、さらにグループ別に分かれたワークショップ形式のディスカッションを行い、障害当事者自身の日常における問題点、ニーズ調査を実施した。特に、障害者及び彼等の団体のエンパワメントに直結する手話及び英語の学習、雇用へのアクセスが制限されていくことから生じる経済的問題、技術向上を目的とする雇用に直結した技術習得へ意思、さらに情報へのアクセスが欠如している現状から同分野における支援を期待する声も多くあった。また、参加者の多くはプノンペン、若しくは近郊に在住していること、さらに支援団体で活動する者が多いことから、農村地域の障害者に比べ生活水準も比較的高いものと考えられるものの、実際は経済的に問題を抱えていた。同ワークショップで収集された質問表に加え、さらにNGO団体責任者を通じて、プロジェクトに参加する農村地域及び都市の貧困層に属する障害者に対する質問表調査も実施され、合計104名から質問表を回収。

質問表調査結果は翻訳後、現地調査報告書として分析結果を後日報告するものとする。104 名の概要データは以下の通り：

性別	男 53名	女 38名	未回答 13名					104名
年齢	10 - 19歳 16名	20 - 29歳 35名	30 - 39歳 31名	40 - 49歳 14名	50 - 59歳 5名	69 - 69歳 1名	不明 2名	
障害	身体 62名	視覚 8名	聴覚 7名	知的 1名	その他 15名	不明 11名		

■ プロジェクトサイト訪問 - 4月6日

Action on Disability and Development (ADD)プロジェクトサイトであるKom Pong Speu県Krang Ampur村（35～36世帯）で活動する当事者支援グループを訪問、当事者グループのメンバーと意見交換を行い、グループの活動、農村における障害当事者の生活、及び問題点における聞き取り

調査、さらに質問表調査を実施した。メンバーが高齢者または児童であり非識字者であった。質問表は5名から回収。Krang Ampur村は、首都プノンペンから1時間30分程の距離といった都市近郊地域であることから、カンボジア農村地域全体のニーズというよりも、農村地域における一現状として有益なデータが収集できたといえる。今後、農村地域における障害者の現状、問題点、支援団体の活動ネットワークを明確にする意味において、調査を実施することはセンター活動の波及効果を考慮する点からも重要な意味をもつといえる。

以上
アイシーネット（株）元澤